

満洲語の多様な形態素 *-ngge* の文法的位置付け

早 田 輝 洋

【要旨】 従来の満洲語の文典も辞書も満洲語の形式 *-ngge*, *-ingge*, *ningge* の区別を明確にしていない。これらの形式については名詞と形容詞の別も十分に記述されていない。

本稿では満洲語資料の時代を a) スルハチ、ホンタイジの時代 (16世紀末～1643)、b) 順治年間 (1644-1661)、c) 康熙年間 (1662-1722) に分けた。a) は殆どすべて無圏点文字による手書き資料、b) c) は主に有圏点文字による木版本資料である。a) にだけ動詞語幹に *-ngge* の直接続く例が 14 例もあった。a) 時代の資料をもとに仮定した派生規則の例外は、当然 b) c) と時代が進むにつれ多くなる。派生形態素 *ni-ngge* の単純形態素 *ningge* への変化は顕著な通時変化の例である。

a) b) の満洲語話者は満洲地区で生育し、c) の話者は北京という完全な漢語環境で生育している。康熙帝の時代の満洲語はそれ以前の満洲語と文法的にも顕著に違うことが分かった*。

キーワード: 満洲語の史的变化, 無圏点満洲文字, 形式名詞, 単一形態素語

1. 序説

満洲語には 3 個の形式名詞 *-ngge*, *-i-ngge*, *ni-ngge* と 3 個の形容詞形成接辞 *-ngGa*, *-ngGo*, *-ngge* という、表面的には音形も文法的機能も意味もかなり多様な分布を示しながらも関連して考察しなければならない一群の形式がある。今までの満洲語の研究では、この多様な *-ngge* 類についての記述に曖昧なものが多い。

今回ある程度整ったデータベースに基づいて、上記 6 個すべての形式について考察を進めたいと思う。

1.1. 満洲語の歴史と資料

本稿で用いた満洲語資料は以下のとおり、自力入力した満洲語約 180 万語である¹。

① 後金～清初期: 『満文原檔』『内国史院檔』

満洲語は満洲・トゥングース語族に属する言語である。満洲人はモンゴル語で文章を書いていたのを、公式には明・万暦 27 【1599】年にモンゴル文字を用いて満洲語を表記するようになった。台北故宮博物院所蔵の明・万暦 35 【1607】年から清・

* 本稿の執筆にあたり、二名の匿名査読者の方々、『言語研究』編集委員会の方々から貴重かつ有益なコメントを頂いた。この場を借りて感謝申し上げる。

¹ 文字列の検索には、KIS (株) 漢字情報サービスの木村展幸氏の作成になる KisKwic for Windows を用いた。

崇徳元【1636】年までの檔案類（一葉の木版刷りの布告文以外はすべて手書き）全40冊の影印が1969年に同院より全10冊に製本され『旧満洲檔』として刊行された。これは2005年に『満文原檔』の名で、一層良質の影印・装丁で出版された。筆者は、現在利用できる最古期満文資料としてこの『満文原檔』を用いている。『満文原檔』は時に「満原」と略稱する。満原は塗抹改削も多く、筆者の読める所だけローマ字転写して50万語程になる資料である。これに次いで古い『内国史院檔』（北京故宮博物院中国第一歴史檔案館所蔵）は記事内容が『満文原檔』の時期と重なる部分があるが、両者比較して見ると『内国史院檔』（略稱「内国」）の方が同じ記事でも新しく改変されていることが分かり面白い。『内国史院檔』は順治2【1645】年末の記事までしか筆者はデータベース化していないが（30万語余）、これを用いる。これも塗抹改削の他、湿気による汚損の甚しい所が多い。すべて手書き文書である。

満洲人は最初モンゴル文字を殆どそのまま用いて満洲文を書いていたが、固有名詞の判読に曖昧性が多く不便であるという理由で、公式には後金・天聰6【1632】年にそれまでの文字に圈点等の区別符を附した文字を使うことにした。それまでの圈点の無い文字を「無圈点文字」、圈点を附した文字を「有圈点文字」あるいは「加圈点文字」と稱している。実際には1632年より可成り前の記事にも圈点が多少は見られるし、文字改革以後でも『満文原檔』40冊中の最後の2冊以外は有圈点・無圈点の混淆表記である。『内国史院檔』は一般に有圈点文字で書かれている。無圈点文字は有圈点文字から圈点を除いただけのものだ、と思っている人がある。実は語形も用語も表現も変える言語改革——政治的な意図もありそうな改革だった。

松村潤（2001: 26-7）によると、『満文原檔』40冊中の37冊について乾隆期18世紀後半に無圈点本一部と有圈点本一部の重鈔が行われたという。乾隆期に重鈔された有圈点本が明治38【1905】年に内藤虎次郎によって発見され、『満文老檔』と名付けて学会に紹介、明治45【1912】年写真に撮って日本に将来された。『満文老檔』（略稱「老檔」）は神田信夫・松村潤・岡田英弘等による訳注（1955-1963）があって便利である。40冊中の残余の3冊は民国24【1935】年に発見されたという。

②順治期：『満文三国志』

順治期の資料として『三国志演義』の満洲語訳文を用いる。本稿では『満文三国志』（略稱「満三」）と呼ぶ。順治7【1650】年の序文が附いている刊本である²。入関（順治元【1644】年、清軍が山海関を越え北京に入った年）以前に生まれた人達の満洲語である。刊本であるが、徹底的に満洲文字を用いていて、漢字は一切使われていない。版心は各丁に「書名」「巻数」「丁数」が満洲文字で記されている。これも全50万語程度であるが、全24巻中一卷分は早田清冷氏の入力による。

③康熙期：『満文金瓶梅』

²『三国志演義』の満洲語訳本は順治本の他に、順治本を写した、しかし誤脱の多い、雍正期の満漢合璧本（その漢文テキストは翻訳底本ではない）と錫伯本（1985）がある。順治本の翻訳底本は流布本ではなく「嘉靖本に類似のテキストを原典とした」（岸田1997: 38）という。岸田（1997）の他、早田（2008）も参照。

康熙期の資料として『金瓶梅』の満洲語訳文を用いる。本稿では『満文金瓶梅』(時に「満金」と呼ぶ³)。康熙 47【1708】年の序文が附いている刊本である。本文には、漢語固有名詞、詩文、諺に限らず振り漢字が非常に多い。各丁の版心には上から「書名(満洲文字)」「回数(漢字)」「丁数(漢字)」となっている。約 50 万語から成る。

1.2. 満洲文字のローマ字転写法と満洲語の音韻⁴

現在有圏点満洲文字のローマ字転写法としては、日本では Möllendorff 式が一般的である。固有満洲語の転写については、初期のフランス語式の転写法と現代の中国の一部の方式、キリル文字による転写法を除けば、どの転写法もほぼ同じである。Möllendorff 式の「外字」の転写法は日本以外では殆ど使われていない。

無圏点満洲文字は軟口蓋子音 ([k][g][x~ɣ]) と後部軟口蓋子音 ([q][g][χ~ɣ]) との区別——前者は陰母音語に用いられ、後者は陽母音語に用いられる——は厳密に守られているが、音素の区別は概して不完全である。満洲文字でよく区別されている陰母音系・陽母音系の子音字の区別が Möllendorff 式の転写法では全く無視されている点、陰母音系・陽母音系の母音字の区別がされていない無圏点字を転写するには Möllendorff 式は問題である。

後の有圏点時代の区別を先取りして表記するのは共時的転写とは言えない。歴史的变化の可能性、対応する有圏点資料が得られない場合の問題もある。筆者としては Möllendorff 式でない方式——原字にできるだけ対応している転写方式——を用いているが、本稿では一般の便宜を考慮し、{ } 内に斜体で推定上の音の(あるいは後代の音の) Möllendorff 式転写を、必要に応じて添える。{ } 内では形態素境界「-」は書かない。本稿の転写方式は原則として早田(2011a)に従う⁵。本稿で{ }に囲んだ Möllendorff 式の転写は、無圏点期の多様な綴りで表されている形式の代表形として用いる場合がある。

今回問題にする *-ngge* の自立性は極めて弱く、表面レベルでは現代日本語(東京方言等)の助詞よりも附属的で、直前の単語と一体になって発音されたものと想像

³『満文金瓶梅』の翻訳底本は詞話本でも張竹坡本でもなく、崇禎本(あるいはそれに近い本)だと思われる。早田(1998a: 4-5)参照。

⁴筆者は無圏点期も有圏点期も /i e a o u/ の 5 母音体系であると考えている。母音調和から /i e u/ は陰母音、/a o/ は陽母音とするのが便利である。ただ文字は、無圏点期 i e a o ü の 5 種類(e は語頭でのみ a と区別されていた)、有圏点期 i e a o u ü の 6 種類である。無圏点文字と有圏点文字との対応については早田(2014: 72-74)参照。

⁵本稿の転写法は根本的には、満洲文字で区別されているのに Möllendorff 式では無視されている軟口蓋子音 (k, g, x) と後部軟口蓋子音 (q, G, X) の区別の保持である。他は附随的で、形の上で a/e, o/u の区別の無い文字は k, g, x の次でそれぞれ e と u にし、他はそれぞれ a と o にした。母音の次の o/u の区別の無い o の形の文字を U にした。f と w は右側に一画出していないものはすべて w にし、右側に出ているもののみ f にした。Möllendorff 式で ü にしている文字は ü にした。この文字は無圏点期には大部分陰母音であった。後代に圏点を附して区別していても当該文献で圏点を附さず区別していない文字に区別はしない。以上が主たる所である。

される。ng の部分が [ŋ] と発音されたことは間違いないであろうが、音韻論的な分析は他日に譲りたい。本稿では満洲文字表記を尊重して、研究書からの引用以外では、満洲語は一般に転写形で表記する。原文のスペースはそのまま残すが単語であっても必ずしもスペースで句切らない。形態素の境界には「-」（ハイフン）を挿入する。

1.3. -ngge 類の概観

満洲語の -ngge 関係の形態素全体を概観する。

○**形容詞**：以下の a) b) c) は同一形態素の母音調和による交替形である。代表形として適宜 -ngGA で表す。-ngGA は基底表示にも便宜的に用いることがあるが、厳密な意味では音韻形でない。あくまで表示上の代表記号である。-ngGA が直前形態素（一般に名詞）に後続して出来た形は形容詞の機能を持っている。正書法上スペースなしで直前形態素に接辞として後続する。

- a) -ngGa 例：qan iNi aqo-**ngga** joi ba 『満文原檔』1-5-6⁶（N は無点の n）
 {*ban ini a**h**ūngga jui be*} 「汗は自分の長子（長兄**たる**子）を」
- b) -ngGo 例：qoro-**nggo** maike kesa qoni-mbi 『満文原檔』1-23-2
 {*bor**o**nggo meibe gese gūnimbi*} 「毒蛇（威力**有る**蛇）のように思う」
- c) -ngge 例：ilan betxe-**ngge** XūntaXan emke 『満文原檔』10-160-3
 {*ilan beth**e**ngge hūntaban emke*} 「三本脚の**附いた**盃一個」

○**名詞**：以下の d) e) f) は名詞の機能を持っている。d) と e) は正書法上スペース無しで直前形態素に接辞のような形で後続する。

- d) -ngge 例：türi-ma qai-mbi sa-ke-**ngke** ba tasan sa-mbi-U 『満文原檔』1-24-2
 {*durime gaimbi se**e**ngge be tašan sembio*}
 「奪い取ると言った**こと**を偽りであると言うのか。」
- e) -i-ngge 例：gürun geli we-**i-ngge** 『満文原檔』9-235-4
 {*gurun geli we**i**ngge*} 「国は一体誰の**もの**であろう」

次の f) は、正書法上スペースに後続する独立の単語の形をしている。

- f) ni-ngge 例：gegen Xan **ni-ngge** bi-xe 『満文原檔』8-173-9
 {*gegen han **n**ingge bibe*} 「ゲゲン汗の**もの**であった」

-ngge 形の形態素は大きく言って上の a) b) c) のような形容詞形成接辞と d) e) f) のような形式名詞的なものがある。注意すべきことは、満洲語の形容詞・動詞連体形は一般にゼロ形式名詞をともなって名詞句を形成するし、また名詞も必ずしも属格形態素をともなわずに後続名詞（句）を連体修飾しうる、ということである。したがって形容詞と名詞の区別が曖昧になりやすく、従来の多くの満洲語文典で -ngge 形の形態素の記述に混乱を来している。

⁶『満文原檔』第1冊5頁6行目の意。以下同じ。

1.4. 既成文典類の記述

『清文啓蒙』(雍正8【1730】年)など清朝時代の満洲語の教科書は少なくとも *-ngge* 類に関しては漢語の「是」「的」にあたる、と書くのみでおよそ役に立たない。そこで西洋人による満洲語研究に頼ることになるが、これがまた問題である。

第一に時期的な問題で、Amiotの文典(乾隆52【1787】年)・辞書(乾隆54【1789】年)が18世紀も終りの頃で、小さいながらも辞書と言える Gabelentzの辞書が同治3【1864】年、Захаровъの辞書が光緒元【1875】年、文典が光緒5【1879】年、転写法だけで有名な Möllendorffの文典は光緒18【1892】年まさに19世紀末である。同時代の北京に満洲語を第一言語とする人は当然いない。さりとてこれらの辞書・文典を書いた人たちは17世紀前葉の無圏点満洲語文献も読んでいない。すべて擬古文あるいは漢化した満洲語に親しんでいる人たちである。

辞書は一般に単語単位で登録されていて、単語より小さい形態素は、辞書ではなく文法書で扱われている。先に挙げた *-ngGa*, *-ngGo*, *-ngge*; *-ngge*, *-i-ngge*; *ni-ngge* の中で一般に単語と認められているものは *ni-ngge* だけである。満洲語を母語とする満洲人も安定してスペースを前後に置けるのは *ni-ngge* だけだと言えよう。*ng* で始まる音連続を単独で発話しなかったであろうし、満洲文字もその中に含まれるウイグル文字の使い手は往時の人も今の人も(現代シベ人)も、スペースを用いてほぼ単語に句切る書き方をしている以上は、スペースを単語の境界と認めるのが自然であり、*ni-ngge* だけが単語と認定されているものと考えられる。ただ言語学の面からする単語の単位については後述する(8)及びその前後)。

非母語話者による満洲語の記述で注意すべき第二のこと——勿論満洲語に熟達している場合は問題無いのであるが、満洲語の初期の研究者には時に見かけることである——記述者の母語の特質から「繫辞」と「存在動詞」の区別の問題がある。肯定形も否定形も「繫辞」と「存在動詞」の間に形態上の区別の無い言語の場合である。満洲語・日本語・漢語等は、肯定形と否定形で「繫辞」と「存在動詞」の間に区別があり、普通問題は起こらない。

雍正時代の満洲語の教科書『清文啓蒙』(雍正8【1730】年)にある例(1)の解釈について、早田(2006: 33)は「Gorelova(2002: 368)は、Pashkov1の誤解をそのまま引継いで、【中略】明らかな存在動詞の *bi* を繫辞として挙げている」と書いている。

- (1) abqa de *deyere GasXa *bi*, na de feksire gurgu *bi* 天上有飛禽。地下有走獸。2-3a
「天に飛ぶ鳥あり。地に走る獸あり。」*Gorelova(2002: 368)は *deyera* とする。

しかし、Gorelovaの誤解はЗахаровъの文典(光緒5【1879】年: 131)中の同文のロシア語訳(2)(a)を引継いだものに違いない。Gorelova(2002: 368)の英訳を(2)(b)として添える。Gorelovaは(1)の二つの *bi* に COP(ula) というグロスを付けている。

なおЗахаровъの文典では、(1)の *deyere は дэѳрэ【deyere】と正しく転写している。

- (2) (a) летающія на небѣ суть птицы, бегающіе по землѣ суть звери
 (b) Those flying in the sky are birds, those running on the earth are animals

印欧語では、古来形容詞は名詞の低位区分とされていて、「名詞」と「形容詞」の区別に曖昧な所が出てくる。満洲語も（古日本語も）非派生形容詞（primary adjective）では「名詞」と「形容詞」の形態的区別が無いことから、満洲語を扱う場合に、特に無圏点期の資料に接することなく、多少とも漢化した満洲語ばかりを扱っている人たちには誤解が生じやすい。満洲語では、非派生形容詞でこそ「名詞」と「形容詞」の形態的区別が無くても、派生形容詞（derived adjective）では区別がある、と言うべきである。grammatical gender 以外の点で稀薄な印欧語の名詞と形容詞の区別、さらにゼロ形式名詞附加による満洲語の形容詞・動詞連体形の名詞化と相俟って、満洲語の研究には、個人差はあるが、「名詞」と「形容詞」の区別が心許ない。

少なくとも -ngge 類に関する従来の研究では、津曲（2002）になって初めて取り上げるに値するものになった、と言わなければならない。そこに到るまでの一部をごくかいつまんで紹介する。引用（の拙訳）は「」で囲む。●は筆者のコメントである。

○ H. Conon de la Gabelentz. (道光 12 【1832】年). *Éléments de la Grammaire Mandchoue*. Altenbourg.

● Gabelentz の文典は -ngge 類に関するまとまった記述は無く、処々方々に色々の言及がある。満洲語の例文は宣教師の満洲語文かとも思われるものが多く、出典も明記していない。

(p. 107) 「215. この語尾 -ngge あるいはその同意語 ningge は省略された、もしくは補うべき名詞の、代わりの役を常にする。」

● -ngge は語尾であり、ningge はその同意語である、としていることが分かる。

○ H. Conon von der Gabelentz (同治 3 【1864】年) *Sse-schu, Schu-king, Schi-king in Mandschuischer Uebersetzung mit einem Mandschu-Deutschen Wörterbuch. II. Heft. Wörterbuch*. Leipzig.

「ningge 欠けている名詞の代行をする。」

● 見出し語 ningge の説明であるが、形式名詞であると認めている。

○ Adam, Lucien (同治 12 【1873】年) *Grammaire de la langue mandchou*. Paris.

p. 30 「63 -ngga, -nggo, -ngge は抽象名詞に代わる形容詞を形成する。

Ex.: *gosi-ngga*, amoureux; *esihe-ngge*, écailleux; 【後略】」

p. 30 「66 -ingge. この合成 (*i+ngge*) 語尾は名詞を所有形容詞に変換する。Ex.: *niyalma* 人; *niyalma-i-ngge* 人間の、人に固有の。【この満洲語は「人のもの」】

-ingge は人称代名詞を所有代名詞に変換する。Ex.: *siningge*. 汝のもの。」

● 満洲語の形容詞と名詞の区別はよく認識されていない。

p. 37 「102 形容詞に ningge の続いたものは名詞になる。Ex.: ehe ningge, 悪い人, 物」

○ Иванъ Захаровъ (光緒元【1875】年) *Полный маньчжурско-русский словарь*. Санктпетербургъ. 【キリル文字による転写はローマ字転写に換えた】

「ningge; 名詞の後に、あるいは【中略】連体形の後に【中略】置かれる小辞で、形容詞を表現する、また主格あるいは主語を表す。【ningge の前の】単語と合成して ngge に短縮する。」

● ningge は形容詞にも名詞にもなるような説明である。また ningge の短縮形が ngge だとしている。

○ Иванъ Захаровъ (光緒5【1879】年) *Грамматика маньчжурского языка*. Санктпетербургъ. 【キリル文字による転写はローマ字転写に換えた】

p. 77 「§ 45. 形容詞は、一次形容詞と派生形容詞の二種がある。」

p. 80 「§ 50. 二次形成形容詞は【中略】[一次]形容詞から【中略】派生し、その性質の或る対象への所属を表す所有形容詞である。これらの所有形容詞は、所有代名詞のように、単語と密着して書かれる特別の形容詞語尾 ngge の附加によって形成される。しかしこの語尾は一次形容詞【中略】の後に分離して【書かれて】いるときは特別の小辞 ningge に変わる、すなわち更に属格成分 ni が加わる。」

●一次形容詞がどういうときに分離して書かれて ningge になるのかの記述がない。

p. 81 「音節 ngGa, ngge, nggGo の、語根への附加によって形成される形容詞は、所有形に変更する際に更に ngge を附加する。例: amtangGangge 「最も美味しい(もの)」, XolbongGongge 「結合した、婚姻により結びついた、結婚した、妻帯している(もの)」

●上の amtangGangge 「最も美味しい(もの)」【下線: 筆者】に見られるような -ngGA-ngge が形容詞の最上級である、という記述がこの Захаровъ 以外にも見られる。-ngGA は形容詞形成接辞、-ngge は形式名詞という認識がなく、-ngge 類が二重に附加しているのを性質・状態等の程度が高い、と解釈したのであろうか。

4) 「同じ語尾 ngge は、満洲語で最も多義的な、動詞から派生した形容詞(動詞の現在および過去の連体形によって表わされる)にも附加される。例: Xüla rengge 【Xülarangge が規範的な形】「読む(もの)」, taciXangge 「学んだ(もの)、博識の(もの)、学者」、nenexengge 「先行した(もの)」, sexengge 「言った(もの)」

●すべて我々の言う意味の「名詞」と「形容詞」の区別が曖昧である。

○ Peeters, Hermes (1940) *Manjurische Grammatik*. Monumenta Serica.

§ 188 「gisurembi akû, ich sage nicht.」● gisurembi akû のような動詞終止形 + 否定辞で否定文になる満洲語は筆者の知らないものである。Peeters の聞いた頃の満洲語はこのようなものだったのであろうか。

§ 203 「sain sain akû, wie geht es?」● <好不好> か? 典型的な漢語的満洲語である。出典は記されていない。

§ 17 「以下の接尾辞は【6種類】殆ど【が】形容詞を形成する。*ngga, ngge, nggo* は名詞から所有形容詞を形成する。*ingge* は所属を意味する形容詞を形成する。」

● *ingge* が形容詞を形成する、というのは適切でない。

§ 29 「どの具体名詞も接尾辞 *ngga, -ngge, -nggo* によって抽象名詞を形成する。
例：*jurgan* 「まっすぐな線・節義」(Recht) から *jurgangge* 【*jurgangga* が規範的】(Gerechtigkeit)。【ドイツ語の Gerechtigkeit は「正義」のような抽象名詞であるが、*jurgangga* は「正義・仁義のある」<有義氣的>⁷ のような形容詞であり、名詞として用いられるときは「正義・仁義のある人」という具体名詞である。*jurgangge* という形は『満文原檔』『内国史院檔』『満文三国志』『満文金瓶梅』には見出せなかった。】
「どの具体名詞も形容詞になる。

a) 他の名詞の前に配置することで：例、*sele futa* 【直訳：鉄網】「鎖」

b) 接尾辞 *ingge*: *niyalmaingge, dem Menschen zugehörig*】

● ドイツ語の *zugehörig* は「【人に】属する、【人の】ものである」という形容詞だが、*niyalmaingge* は形容詞ではない。「人に属するもの」という意味の名詞(句)である。

● やはり名詞と形容詞の区別が怪しい。*-ngge* と *-ingge* の区別は書いてない。*ni-ngge* については何も触れていない。

○ Erich Hauer (1952–1955) *Handwörterbuch der Mandschusprache*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.

「*ningge* Postposition, die ein fehlendes Substantiv vertritt; der welcher, die welche, das welches; einer, eine.」

● Gabelentz の辞書 (1864) の記述：Partikel, die ein fehlendes Substantiv vertritt. 【欠けている名詞の代用をする小辞。】と同じと言える。形式名詞である、と言う。

○ 上原久 (1960) 『満文 満洲実録の研究』東京：不味堂。

p. 87 「*-ngga, -ngge, -nggo*. 接尾辞母音が a・e・o の交替性を示すものの一つに *-ngga, -ngge, -nggo* がある。名詞に同根語を持つ種類の連体詞である。

これによく似たものに、動詞の語幹に接する動名詞的接尾辞 *-ngge* があって、「満洲実録」には 49 語 171 例があるが、これは常にこの形をとっていて、*-ngga, -ngge, -nggo* の交替はない。」

p. 480 「*-ngge* この接尾辞は動詞に接尾して、その動詞に名詞的性格を附加する。」

● 「動詞に接尾して」となっているが、挙げられている例はすべて連体形である。動詞の連体形に接尾して、とすべきである。

● *-ingge, ni-ngge* についての記述は無いようである。

○ Haensch, Erich (1961) *Mandschu-Grammatik*. Leipzig: VEB Verlag Enzyklopädie.

● p. 36–38 の接尾辞の表に、*-ngGa, -ngge, -ngGo, -ngGü* を一グループとして挙げて

⁷ 漢字のみからなる日本語と区別するために、漢語を適宜 <> で囲む。

いるが、-ngGü は -ngGa, -ngge, -ngGo と共時的に同一の形態素を共有しているとは思われない。falangGü「掌」が例の一つとして挙げられている。

p. 54「連体形は語尾 -ngge によって名詞化が可能になる: alarangge「告げること, 報告」」

● -ngge の記述はこれだけである。-i-ngge, ni-ngge についての記述はない。

○ Norman, Jerry (1978) *A Concise Manchu-English Lexicon*. Seattle and London: University of Washington Press.

「NINGGE the one which …, he who」

その改訂版 Norman, Jerry (2013) *A Comprehensive Manchu-English Dictionary*: the Harvard University Asia Center も ningge の項は全く同じである。

○ 胡增益 (1994) 『新滿漢大詞典』烏魯木齊: 新疆人民出版社。

● 見出し語「ningge, -ngge」の記述では、表面形 ningge の他には、-ngge 一般の記述はなく、i で終るものに附いた -ngge だけである。どういう場合に ningge が用いられ、どういう場合に -ngge が用いられるか、の記述はない。

○ 河内良弘 (1996) 『満洲語文語文典』京都: 京都大学学術出版会。

p. 83「3 形容詞の名詞化 (nominalization) 1 満洲語の多くの形容詞は名詞として用いられる。他のアルタイ諸語と同様に、形容詞と名詞との区別は厳密ではない。」

● 「形容詞と名詞との区別は厳密ではない」というのは如何なものであろうか。

p. 84「2 形容詞に -ngga/-ngge/-nggo/-nggü/-nggu の語尾を附して名詞化することができる。-ngge: icengge 新しいもの【中略】」

● -ngga/-ngge/-nggo は、名詞に附いて形容詞化する形容詞形成接辞であり、icengge の ngge は、形容詞に附いて名詞句を形成する形式名詞である。

p. 84「形容詞の後に ningge (物, 者) を附して意味的に名詞化することができる。」

● どういう形容詞の後に ningge を附して名詞化できるのかは時代によって違う。

○ 津曲敏郎 (2002) 『満洲語入門 20 講』東京: 大学書林。

● 津曲 (2002) の記述はそれ以前の記述と大きく違い非常に明確になっている。当然、形容詞形成の -ngGa{ngga}~-ngge{ngge}~-ngGo{nggo} (母音調和による異形態) と名詞句形成の -ngge/ningge を明確に区別して記述している。津曲 (2002) の満洲語転写は Möllendorff 方式を用いている故、その引用も Möllendorff 方式のままとする。

◎ 津曲 (2002) の「第 11 講 語幹形成接尾辞」「3. 形容詞形成 (4) -ngga~-ngge~-nggo」(p. 75)「名詞に付いて「~のある, をもった」の意の形容詞を作る。さらにそのまま名詞化されて「~のあるもの」となる場合もある。【中略】名詞を作る -ngge と区別すること。gosin「仁愛」—gosingga「仁愛の心ある(人)」、gebu「名」—gebungge「(という)名のある(人, 物)」。

◎ 津曲 (2002) の「第 11 講 語幹形成接尾辞」「2. 名詞形成 (6) -ngge:」(p. 74): 「名詞属格形や動詞連体法などに付いて、「~のもの, ~するもの/こと」の意の名詞(節)を作る。その生産性はきわめて高い。

名詞に付いた例：boo-i-ngge 「家のもの」、niyalma-i-ngge 「人のもの」。
 代名詞に付いた例：min-i-ngge 「私のもの」、we-i-ngge 「だれのもの」。
 形容詞に付いた例：adali-ngge 「おなじもの」、eberi-ngge 「劣ったもの」、
 akū-ngge 「ないもの」、ete-he-kū-ngge 「勝たなかったこと」。
 動詞に付いた例：gene-re-ngge 「行くこと」、uda-ha-ngge 「買ったもの」。

◎「ちなみに独立の名詞として ningge 「もの」という語があり、似たような使われ方をする：niyalma-i ningge 「人のもの」、cuse moo ningge 「竹（製）のもの」、sain ningge 「良いもの」、banji-ha ningge 「生まれ、人となり」（福田 1987: 648）。

●津曲（2002）の引用する（福田 1987: 648）とは、sain ningge と banji-ha ningge の 2 例のことである。これは福田が『擇翻聊齋誌異』（道光 28 【1848】年）から取って福田の辞書（1987）に収めて訳を附けたもので、19 世紀の満洲語である。sain ningge は古くから有る形であるが。

●津曲（2002）の記述は、-ngge が、名詞に附いた例、代名詞に附いた例、形容詞に附いた例というように明確に区別して記述されている点、従来の記述と違い非常に進歩している。ただ例えば名詞に附く場合は、単に「名詞属格形【中略】に附いて」とするのは気になる所である。「名詞属格形」にはもっと細かい条件が欲しい。

●また「ningge 「もの」という語があり、【-ngge と】似たような使われ方をする」とされているが -ngge とどのように違うかの説明は無い。ningge の続く例として挙げられているのが、sain ningge 以外はひどく新しい時代の語形であるのも気になる。

○早田輝洋（2011b）「満洲語の形式名詞 ngge と ningge の区別」

形容詞形成の -ngGa{ngga}~-ngge{ngge}~-ngGo{nggo} については記述していない。名詞形成の -ngge と ni-ngge だけについて記述を試みている。「従来の記述が明瞭性を欠いているのは、満洲語が既に第一言語でなくなっている時代の資料も調査に混用していることに依るのかも知れない。そこで筆者は資料を時代別に調査することを試みた。」(p. 117) として資料を四つの時代に分けて調査している。

その第 1 期「入関前檔案類」を基礎にした結論として、基底形 -ngge から i-ngge, ni-ngge を派生する規則を次 (3) のように仮定している：

- (3) (早田 (2011b) の (8) : 118) ngge の直前が、
 (a) 母音終り名詞であれば、ngge の前に i を挿入する。(i 挿入)
 (b) 子音であれば、ngge の前に ni を挿入する【o】(ni 挿入)

●すなわち、名詞ならばすべて属格形になるわけではない。母音終り名詞なら i が挿入されて -ngge が後続するが、子音終りの名詞・形容詞なら ni が挿入されてから -ngge が、結局 ni-ngge が後続する。以下早田（2011b）では、『満文三国志』（順治期）・康熙朝奏摺・『満文金瓶梅』（康熙期）と時代が下るに従い例外が多くなっていく様を簡単ながら示している。

2. 本論

2.1. 『満文原檔』『内国史院檔』における *-ngge* 類

2.1.1. 満原・内国の形容詞形成接辞 *-ngGA*

早田 (2011b) で記述を省略してあるこの形態素について述べる。母音調和によって *-ngGa{ngga}~ngge{ngge}~ngGo{nggo}* のように交替する形容詞形成接辞を適宜 *-ngGA* で代表する。

-ngGA は典型的には名詞に附いて形容詞を形成するのであるが、何に附いているのか分からない *cranberry* 形態素を形成しているものも出てくる。さらに二語からなる名詞句の最後の名詞に附いているものも多い。*ilan betxe-ngge* *XüntaXan* [*ilan bethenge būntaban*] 「三本脚のある盃」満原 10-160-3 の *ilan betxe* 「三つの脚」もその例であるが、もっと長い名詞句に附いた例もある。早田清冷 (2012: 26, 30ff) 参照。

満洲語の母音調和の規則は一般に余り明確に述べられていないように思われる。津曲 (2002: 11-12) には母音調和の伝統的な記述法に従った (4) の記述がある。津曲氏の挙げた例を【】内に附する。

- (4) 満洲語の場合、その制限はゆるやかで例外がきわめて多いが、基本的には次のような母音の区別による母音調和が認められる。
- ① 男性母音: a, o, (k, g, h のあとの) *ū* 【例, *ala-ha* 「告げた」, *o-ho* 「なった」】
 - ② 女性母音: e 【例, *gene-he* 「行った」】
 - ③ 中性母音: i, u 【例, *ili-ha* 「立った」, *ji-he* 「来た」】

アルタイ的な母音調和は、唇の調和（母音の円唇性の順行同化）を別にすれば、一単語内で母音は、①男性母音だけか②女性母音だけで③中性母音は①とも②とも共存する、というのが典型的なものとされて来た。しかし、満洲語の母音調和は実際には必ずしもこのとおりでない。満洲語に関する従来の記述で母音調和に関して規則性が論じられているのは、音韻規則になっている動詞の連体形屈折語尾 (*-ra~re~ro*, *-Xa~xe~Xo*, *-qa~ke~qo*) だけであった。しかし母音調和の記述が連体形語尾だけのものでは物足りない。

動詞連体形の母音調和に関する早田 (2003: 8) の案は以下の如きものであった。

- (5) 唇の調和を別にして、未完了連体接辞を /re/, 完了連体接辞を /χa/ として：
- A. 直前の母音が a であれば, *re* → *ra*
 - B. 語幹の母音が e i [u] (+high) だけであれば, *χa* → *xe*

(5) B で [u] と指定したのは、音素 /u/ が [u] と [ʊ] になった段階で、[u] は含むが [ʊ] は含まないことを意味する。規則 (5) は有圈點期の資料に基づいたものであるが、5 母音体系 /i e a o u/ が表面レベルに近づいて、q, G, χ の直後の u が ʊ になった後で B が適用されなければならない。略式に言えば、陽母音（男性母音）語であれば連体接辞 *-re* は陽母音的に *-ra* になり、陰母音（女性母音）語であれば連体接辞 *-χa* は陰母音的に *-xe* になる、というものである。(5) の母音調和規則は、母音調和の

うな綴の度数分布を見せている。語基の {*fulin*} に当る形も含める。

表1 {*fulin*}{*fulingga*} の綴りの分布

	『満文原檔』 冊番号					『内国史院檔』	
	1	4	5	7	10	太祖朝	崇徳4年
woli-ngqa	3	2	1			9	1
wolin				1			
wuli-ngGa					3		3

「天命によって」「(年号の) 天命…年」等に用いられている。{*fulin*} は順治帝の名でもある。『大清全書』(康熙22【1683】年序)には「{*fulin*} 天命。乗受。」となっている。『満文原檔』『内国史院檔』には陰母音形 {*fulingge*} は見られない。

woli-ngqa, wuli-ngGa は恐らく [fuliŋga], wolin は [fulin] のような音声形だと思うが、/fulin/ の /u/ と /i/ から陽母音異形態 [ŋga] を予測するのは難しそうである。

例外の指定として、基底母音に u の他に ū を認めるという抽象的な解決法 (6) (a) と、 [+陽] のような語基単位の例外標識を仮定する解決法 (6) (b) とが考えられるであろう。kimu-ngge 「怨みを懐く人」は kimun 「怨み」を陰母音語として [ŋge] が後続している。ここでは -ngGA の基底形を仮に /nge/ とした。

(6)

	(a)		(b)	
	fūlin+nge	kimun+nge	fūlin+nge [+陽]	kimun+nge
母音調和	fūlin+nGa	〃	fūlin+nGa	〃
ū → u	fūlin+nGa	〃		
他の規則	fuliŋGa	kimuŋge	fuliŋGa	kimuŋge

「ū → u」のような絶対中和規則を用いる (6) (a) より (6) (b) の方が好ましい。

陽母音語 {*fulin*} に似た形として <夫人> 「妃、諸侯の夫人」の単数形 {*fujin*}, 複数形 {*fujisa*}, の /fuji/ がある。『満文原檔』『内国史院檔』の有圈点部分の表記は wūji-sa, wuci-sa, wuji-sa である。陽母語基 /fuji/ に附いた有圈点表記資料の複数形接辞 182 例はすべて陽母音複数接辞 sa であり、その他に陰母音形 se は /fuji/ に続いている。

陽母音語基か陰母音語基かの判断基準としては、(4) よりも (7) の方が妥当のように思われる。それでも上の多くの例を見てわかるとおり例外が多い。/i, u/ については例外標識の必要が多いようである。(7) の /o/ は (/u/ との区別の点で) 無圈点表記では単独での確定は難しい。

- (7) 語基に /a o q G X/ が一つでもあれば陽母音語基
語基に /e/ があれば陰母音語基

母音が陽母音か陰母音か（注4参照）、ということと、語基が陽母音語基か陰母音語基か（7）ということとは別のことである。母音の問題と語基の問題の違いである。

形容詞形成接辞 *-ngGA* は, {*fulingga*}「天命」もそうであるが, 固有名詞形成に多く用いられている。固有名詞の場合, 語構成の透明な構造のものもあるが, 多くは不透明である。固有名詞には *cranberry* 形態素が多いばかりでない。そもそも固有名詞と普通名詞の区別も古い文献資料では定かでないものが多い。今回の資料では *-ngGA* によると思われる固有名詞形成は, その資料の性格から『満文原檔』『内国史院檔』に多く, 漢語小説の翻訳の『満文三国志』『満文金瓶梅』には当然ない⁹。

2.1.2. 満原・内国の形式名詞 *-ngge*

これについては早田 (2011b) で取り上げてあるのであるが, 既に述べたように早田 (2011b) では不十分な資料から規則を仮定しており修正を要する。以下, 早田 (2011b) では述べられていない事実や考察を述べたい。

母音調和しないこの *-ngge* が接辞でなく形式名詞と考えられるのは以下の理由による。*-ngge* に前置する一般的な形式は (8) のとおりである。『満文原檔』に限って動詞語幹延べ 14 例が直接 *-ngge* に前置されている。

(8) 形式名詞 *-ngge* に前置する形式

完了・未完了の動詞連体形	<i>se-xe-ngge</i> 「言ったこと」完了形
	<i>se-re-ngge</i> 「言うこと」未完了形
形容詞	<i>ja-ngge</i> 「容易なこと」
否定形容詞 (<i>aqū</i> → <i>qū</i>)	<i>Gai-Xa-qū-ngge</i> <i>waqa</i> 「受け取らなかったのではない」
	<i>dasa-Xa-qū-ngge</i> <i>aqū</i> 「治めなかった者は無い」
名詞属格形	<i>Xafa-sa-i-ngge</i> 「官人等の物」
<i>i</i> 終り名詞	<i>jergi-ngge</i> 「(…) 級のもの」
数詞	<i>uyunju-ngge</i> 「九十 (人) のもの」
代名詞属格形	<i>min-i-ngge</i> 「私の物」
動詞語幹	<i>etu-ngge</i> 「着る物」

(8) 中の「*i* 終り名詞」というのは, *i* で終る名詞に属格助詞 *-i* が後続して, その *i* 連続が, 満洲語に一般的な同一単語内の同音連続の単一化によって一個の *i* になっているものとも思われる。そうだとすれば, 「*i* 終り名詞」という別項を立てる必要はなく, 「名詞属格形」に入ることになる。

「数詞」の属格形は「*n* 日の (朝等)」(*n* は数詞), 例えば「初六の日」*ice ninggun*

⁹ 実際には『満文三国志』の序文中に翻訳者の名として出現している。

-i ineggi のような日附の表現だけのようで、一般には数詞の属格形は無い。

-ngge に前置する形式は (8) に見るとおり (『満洲原檔』だけの例外である動詞語幹を除いて) すべて自由形式 (単語) である。

参考：服部 (1960: 470) の「原則 I. 職能や語形変化の異なる色々の自立形式につくものは自由形式 (すなわち, 「附属語」) である。」

服部の原則 I から、この *-ngge* が単語であり、それに前置する形式も単語であることが分る。すなわち *-ngge* は「形式名詞」といえる。満洲語の母音調和は同一単語の中でしか起こらない。tangGü-*ngge* 「100のもの」、yunju-*ngge* 「90のもの」——これら tangGü「百」、yunju「90」等の数詞に後接する *-ngge* は母音調和しない (形式) 名詞である。

満洲語では、ラテン語等と同様に名詞と形容詞の形態的区別は無いと言える。ラテン語等の文法的性の有る言語では、名詞は固有の性を持ち、形容詞は固有の性を持たず被修飾名詞の性に一致する。この特性から名詞と形容詞の区別は容易であるが、満洲語はそういう特性もなく名詞と形容詞の区別は厄介である。一般の文法書にはその区別について満足のいく記述はないようであるが、種類の判断基準が提案されている。語彙の意味によって区別する人もあるが、そのような意味による区別と形式による区別の並行しない例もあるようである (Güwa「他」、julge「昔」はその例になりそうである (表2, 表3))。この形式名詞 *-ngge* の続き方でも名詞と形容詞の区別が関与している。母音 (a e) 終りの名詞に *-ngge* が続くときは属格形を思わせる *i* が名詞の後に挿入されるが、形容詞は格変化をしないゆえ、*i* は挿入されない。

名詞と形容詞を区別する特徴として、名詞句主要部を修飾する前項位置に来る場合、名詞なら属格形になるのが典型であるのに対し、形容詞の場合は絶対に属格形にならない、ということが顕著である。形容詞否定文には aqū{akū} が用いられ (例, fulgiyan aqū「赤くない」)、名詞否定文には waqa{waka} が用いられる (例, niyalma waqa「人でない」) ことが、よく形容詞・名詞の判定基準に引き出される。そのとおりだが mosa-i kebo eke waqa-U{musei gebu ebe wakao} 満原 1-261-5 (天命4年の記事) 「我等の名分が悪いではないか」のような例の他に形容詞や動詞連体形に waqa-U{wakao} の続く例も或る程度見られる。なお研究すべきである。形式名詞 *-ngge* に続くときの「*i* 挿入」の有無も形容詞か名詞かの判定に有効である。これも名詞の格変化 (属格形) なのであるが、必ずしもすべてが属格形とは言えないようである。

さきの津曲 (2002: 74) の説明を見ると「名詞属格形に【*-ngge* が】付く」と言う。挙げられている「名詞に付いた例」は, boo-i-*ngge*, niyalma-i-*ngge* だけである。名詞なら一般に属格形に *-ngge* が続くような記述であるが、他の母音で終る名詞、子音で終る名詞等の場合はどうなのか、さきの説明では判然としない。

早田 (2011b) では、『満洲原檔』『内国史院檔』の時期では、(3) に挙げたように、母音終りの名詞であれば「*i* 挿入」をして *-ngge* が続き、子音終りの名詞・形容詞であれば「*ni* 挿入」をして *-ngge* が (すなわち *ni-ngge* が) 続く、としている。

津曲 (2002) の中に挙げられている *niyalma-i ningge*, *cuse moo ningge*, *banji-ha ningge* およびそれに類する例は『満文原檔』『内国史院檔』には無い、別の時期のものであるから、満原・内国の時期の規則は (3) で好い、として問題ないのであろうか。

早田 (2011b) で曖昧性を若干残している名詞末母音の例外と *ningge* の例外がどうなっているか、最新の拡大した資料に基づいた結果を報告する。

{*unde*} 「未だ…せず」の品詞は難しいが *-ngge* が附くとき、『満文原檔』では表 2 の最後の例のように「*i* 挿入」があり、名詞に入れておいた方が便利のようである。{*unde*} の前に来る動詞が未完了連体形 (*-ra~re~ro*) であることも {*unde*} の名詞性を物語っている。『満文原檔』『内国史院檔』とも、*/e/* 終り名詞でありながら「*i* 挿入」が行われぬ、という例外がこの時代でも表 2 のように散見する。

表 2 満原・内国の *e* 終り名詞に後続する *-i-ngge* と *-ngge*

	『満文原檔』		『内国史院檔』			
	<i>i</i> 有り	<i>i</i> 無し	<i>i</i> 有り	<i>i</i> 無し		
<i>muse</i>	<i>muse-i-ngge</i> 17	<i>muse-ngge</i> 1	<i>muse-i-ngge</i> 2	<i>muse-ngge</i> *	1	
<i>beile</i>	<i>beile-i-ngge</i> 2	<i>beile-ngge</i> ** 2				
<i>Xafasa</i>	<i>Xafasa-i-ngge</i> 1					
<i>Güwa</i>	<i>Güwa-i-ngge</i> 1					
<i>we</i>	<i>we-i-ngge</i> 1			<i>we-i-ngge</i> 4		
<i>unde</i>	<i>unde-i-ngge</i> 2	<i>unde-ngge</i> 1			<i>unde-ngge</i>	2

* 『内国史院檔』の *muse-ngge* 1 例は塗抹箇所である。

** 『満文原檔』の *beile-ngge* の 1 例は乾隆重鈔の『満文老檔』では *beile-i-ngge* になっている。

「*i* 挿入」には名詞か形容詞かの識別が必要である。{*julge*} 「昔」は名詞か形容詞か、その格変化の実態を表 3 の度数表に示す：

表 3 *julge* 「昔」の格変化形

	属格形	奪格形	その他
『満文原檔』	104	35	64
『内国史院檔』	36	15	16

julge は格変化しており名詞と認められる。*julge-i-ngge* は無い。*julge-ngge* は『満文原檔』『内国史院檔』『満文金瓶梅』には無いが、『満文三国志』に 1 例ある。

/a/, /e/ で終る名詞は表 2 にも示したように原則として「*i* 挿入」が行われて *-ngge* が続くが、他の母音で終る名詞に *-ngge* が続く場合は「*i* 挿入」は無い、とすべきであろう。*i* 終りの名詞に「*i* 挿入」が無いのは、既に述べたように、単語内で同音連続は一音に短縮されるのが一般で、*i* 終りに *i* が後続しても単一の *i* に短縮しているものと思われる。*/u/* 終りの名詞というのも現在見出されている限りは皆数詞で、数詞も (8) に見られるように、一般的には属格標識を取らない: *tangGü* (お

そらく /tanGu/) {tanggū} 「百」 -ngge → tangGü-ngge 「百 (人) のもの (逃亡者)」, unyunju 「九十」 -ngge → unyunju-ngge 「九十のもの」, (emu-emu →) ememu 「或る」 -ngge → ememu-ngge 「或るもの」の如くで「i 挿入」は無い。

『満文原檔』『内国史院檔』では、無圏点表記が多いゆえやや不安ではあるが、/o/ で終る名詞に -ngge の後続した例は確認できなかった。結果として早田 (2011b) の (8) (a), 本稿の (3) (a) 「母音終り名詞であれば」を「母音 a, e 終り名詞であれば」のように修正しなければならない (9)。

(9) 「i 挿入」((3) (a)) の修正版

ngge の直前が,

(a) 母音 a, e 終りの名詞であれば, ngge の前に i を挿入する。「i 挿入」

2.1.3. 満原・内国の形式名詞 ningge

ja 「容易な」, encu 「別様の」, qomso 「少ない」など形容詞なら, 形式名詞 -ngge が後続したとき, それぞれそのまま ja-ngge 「容易なこと」, encu-ngge 「別様のもの」, qomso-ngge 「少ないこと」等になる。否定形の aqū{akū}, -qū{-kū} も形容詞と同様である。bu-xe-qū-ngge 「与えなかったこと」, aqū-ngge aqū 「無いことはない」。

早田 (2011b) では, (3) (b) に記したように, -ngge の直前が「子音であれば」-ngge の前に「ni 挿入」を行ってから -ngge を後続させる, としている。早田 (2011b) の根拠にした順治初纂本満文『太宗実録』の dureng ningge のような ng に ni-ngge の後続した例は, 少なくとも筆者は『満文原檔』『内国史院檔』に見出していないゆえ, -ngge の直前が, 「子音であれば」は「n 終りの名詞・形容詞であれば」とする (10)。(なお, 筆者の見た限り『満文原檔』『内国史院檔』では -ngge の前に確実に読める子音の例は皆無であった。また何か挿入母音を介した「子音+挿入母音+ngge」と思われる例も皆無であった。この時代に, n 以外の子音で終る外来語固有名詞はあったが, 形式名詞 -ngge の前にそういうものは来ていないようである。-ngge の直前は殆ど動詞の連体形である。)

(10) 「ni 挿入」((3) (b)) の修正版

ngge の直前が,

(b) n 終りの名詞・形容詞であれば, ngge の前に ni を挿入する。「ni 挿入」

「ni 挿入」の典型的な例:

(11) Xan-ngge → Xan ni-ngge 「汗^{ハン}のもの」

gegen Xan ni-ngge {gegen han ningge} 満原 8-173-9

sain-ngge → sain ni-ngge 「好いもの」

sain ni -ngge {sain ningge} 満原 1-143-7

2.1.4. 満原・内国の例外

『満文原檔』中の例外としては以下の1)～4), 『内国史院檔』には5)が見出された。『満文原檔』の最後の例4)と『内国史院檔』の1例5)は形容詞にni-nggeの附いたものである。1)のalban -i ni-ngkeと4)のekiyexü-ni-nggeは早田(2011b)にも報告されている。

1) alban -i ni-ngke{*alban -i ningge*}「公課のもの」満原 4-333-1 老檔 {*alban ningge*} : alban-nggeに(10)(b)「ni挿入」を適用すればalban ni-ngge{*alban ningge*}になる筈である。乾隆重鈔の『満文老檔』はこの規範的と言えるalban ni-nggeになっている。albanは名詞であり、4-333-1の例外形でalbanの後にni-nggeが続くときにalbanに属格標識が附くということは、「名詞 -i 名詞」(alban ningge → alban -i ningge)すなわちni-nggeも名詞と認識され始めたものと考えられる。

2) jurGan-ni-ngge 満原 8-226-4 : この例は規則的な形jurGan-ngge → jurGan ni-ngge{*jurgan ningge*}「(…)路のもの」であり、老檔{*ememu jurgan ningge*}は規範的な表記である。語中の(間にスペースのない)nnは読みにくくなるわけであるが、この例ではnnの2番目のnに左点を附してあり曖昧性なくnnと読める。音韻的には語中のnnは同音縮約を起こして一個のnになる筈であろう。nnの間にスペースを入れていないこの例は、文字表記上の問題にすぎないと考えてもよいかと思われる。

3) <…wiyangGü ake-i Gūsa-i> ni-ngge {*fiyanggū agei gūsa ningge*}「Fiyanggū Age旗のもの」満原 8-408-8 : <>の部分は後からの書き込みである。1)の{*alban -i ningge*}と同じで、{*alban ningge*}でなく、属格形にni-nggeが附くということは(ここは後からの書き込み個所でもある)ni-nggeの名詞化の表れであろう。ni-nggeという語頭niの形は語頭ngの形より余程自立性が強く語彙化しやすいものと思われる。

4) ekiyexü-ni-ngge{*ekiyehuningge*}「足りないもの」満原 9-419-11 : ekiyexün-nggeが基底形ならば、規則的には「ni挿入」によりekiyexün ni-ngge{*ekiyehun ningge*}になる所である。この形が単に文字表記だけでなく一語化したのであれば語中のnnは、2)の所でも述べたように、n一つにならざるを得ない。それがこの形であろう。

5) ajige ni-ngge「小さいもの」『内国史院檔』順治2年79-8¹⁰: ajige-nggeが基底形ならばajigeは形容詞であるから「i挿入」(9)は適用されず、そのままajige-nggeになる所である。これがajige ni-nggeになっているのは、既にni-nggeが名詞として語彙化し、ajigeとninggeがそのまま形容詞+名詞として並んだと言うべきであろう。ajigeにはajigenという形もあり、ajigen-ngge → ajigen ni-ngge → ajige ni-nggeの反映のようなものも考えたいが、『満文原檔』『内国史院檔』中のajigen 80例弱に対してajige 700例弱という出現度数からすると、ajigenの形の可能性は低くni-nggeの名詞化の力が大きいとすべきであろう。ajige-nggeもajigen ni-nggeも『満

¹⁰「内国史院檔(順治)」のマイクロフィルムの丁・行の数字は筆者が私に振った。

文原檔』『内国史院檔』に無い。

2.1.5. 動詞語幹に直結する *-ngge*

早田 (2011b) では触れていないが、この形式名詞が連体接辞を介することなく直接動詞語幹に後続する例が、固有名詞と思われるものを除いて、『満文原檔』に延べ14例見られる(12)。うち2例(【】内)は塗抹されたもので、1例(<>内)は後からの書き込みである。この形は『満文原檔』以外には見出していない。

(12) 語幹直結形	連体接辞を介した形		
『満文原檔』 語幹 <i>-ngge</i>		『満原』	『内国』
kisora- <i>ngke</i> 【1】 1{ <i>gisurenge</i> }	{ <i>gisurenge</i> }	9	11
	{ <i>gisurebenge</i> }	10	11
eto- <i>ngke</i> 3{ <i>etunge</i> }, (老檔3例{ <i>etunge</i> }) 「着る物」	{ <i>etunge</i> }	8	0
	{ <i>etubenge</i> }	1	0
eto-<i>ngke je-<i>ngge</i></i> bü-wi { <i>etunge jengge bufi</i> } 満原 7-283-6			
cf. jata- ra eto- ra-<i>ngke</i> 「食べる(物と)着る物」 満原 13-42-3,5-22-1			
siUla- <i>ngke</i> 1{ <i>sulenge</i> }, (老檔 { <i>sulenge</i> }) 「收税官」 満原 2-397-8			
	{ <i>sulere</i> <i>ngge</i> , <i>sulebenge</i> }	0	0
{ <i>sulenge</i> } は他に満原に8例, 内国に3例あるが, 皆人名らしい。			
jabo- <i>ngke</i> 【1】 , { <i>jabunge</i> } か { <i>yabunge</i> } か分からない。塗抹箇所である。			
delxe- <i>ngke</i> 1{ <i>delhenge</i> }, (老檔 { <i>delhebenge</i> }) 「分かれた者」			
	{ <i>delberenge</i> , <i>delhebenge</i> }	0	0
üwasi- <i>ngke</i> 1{ <i>wesingge</i> },	{ <i>wesirengge</i> }	1	0
(老檔 { <i>wesikenge</i> }) 「陞級した者」	{ <i>wesikenge</i> }	1	1
je- <i>ngge</i> 1{ <i>jengge</i> }, (老檔 { <i>jengge</i> }) 「食べ物」	{ <i>jeterenge</i> }	21	13
	{ <i>jekenge</i> }	1	0
wota- <i>ngke</i> 1{ <i>fudenge</i> }, (老檔 { <i>fudenge</i> }) 「贈物」	{ <i>fudere</i> <i>ngge</i> }	2	0
	{ <i>fudebenge</i> }	4	0
torolo- <i>ngge</i> 1{ <i>dorolongge</i> }, (老檔 { <i>dorolorongge</i> })	{ <i>dorolorongge</i> }	1	1
「礼する, 礼遇すること」	{ <i>dorolobongge</i> }	0	2
<ebu- <i>ngge</i> ba> de <ing ili-Xa> <1> ?	{ <i>eburengge</i> }	1	0
	{ <i>ebubenge</i> }	0	0
sime- <i>ngge</i> 1, 「賑わうこと」 ?			

このような、動詞語幹に *ngge* が直に続く例は管見の範囲では『満文原檔』にしか見出されていない。数的にも極少ない。それでも『満文原檔』にだけ14例見られるということは書き違いではあるまい。haplologyでもない。語彙として出現頻度の高い動詞に起っていることは確かであるが、この形になる条件は未だ不明である。

2.2. 『満文三国志』における -ngge 類

2.2.1. 『満文三国志』の形容詞形成接辞 -ngGA

『満文原檔』『内国史院檔』期のものとして仮定した陽母音語基・陰母音語基判定基準 (7) は、/o/ については無圏点表記のゆえに十分に明らかでなかったが、『満文三国志』は有圏点表記の刊本であり、/o/ については明確である。-ngGA が -ngGo になる条件としては『満文三国志』の資料からは以下のことが言える。

- 円唇母音 ü, u, U があるだけでは -ngGo にならない: aXü-*ngGa*{*abūngga*}, Xüturi-*ngGa*{*hüturingga*}, Xüsu-*ngge*{*būsungge*}, GaniU-*ngGa*{*ganiongga*} 等
- 母音 o が 1 個あるだけでは -ngGo にならない: mori-*ngGa*{*moringga*}, Gosi-*ngGa*{*gosingga*}, xiyoUšu-*ngGa*{*hiyoošungga*} 等
- -ngGA の附いた語基が 2 音節以上からなり各音節の母音が o であれば -ngGA は -ngGo になる。

以上は『満文三国志』延べ 99 例の -ngGA 由来の -ngGo を持つ形容詞から言える:
 boco-*ngGo*{*boconggo*}, bodo-*ngGo*{*bodonggo*}, bodoGo-*ngGo*{*bodogonggo*},
 bodoXo-*ngGo*{*bodohonggo*}, boljo-*ngGo*{*boljonggo*}, doro-*ngGo*{*doronggo*},
 Xoro-*ngGo*{*horonggo*}, Xošo-*ngGo*{*hošonggo*}

2.2.2. 『満文三国志』の形式名詞 -ngge

『満文原檔』『内国史院檔』の資料から導かれる修正版の「i 挿入」(9) a) は、

(13) = (9a) (a) 母音 a, e 終り名詞であれば, *ngge* の前に i を挿入する。「i 挿入」であった。

「母音 a, e 終り名詞であれば」という条件は『満文三国志』ではどうなるか、確認する必要がある。母音 a, e 以外の母音でも「i 挿入」を介して -ngge が附く例があるだろうか。『満文原檔』『内国史院檔』では、母音 a, e 終りの名詞に「-i 挿入」があり、母音 u の後では「-i 挿入」はなかった。o 終り名詞は、無圏点表記でやや不明確であるが、無いと思われる。

『満文三国志』では i-*ngge* の前に来る名詞で a, e 以外の母音で終るものは無いことが明確である。o 終りの名詞 Golo{*golo*}「路, 省」には「i 挿入」無しで -ngge が後続した Golo-*ngge*{*golongge*}「(…) 路のもの」が 2 例ある。Golo-i-*ngge* の例は無い。即ち『満文三国志』の時代でも「i 挿入」規則 (9) a) は健在である。わずか 3 種 8 例であるが、a 終り名詞にはすべて「i 挿入」が適用されている。ただ、e で終る名詞なのに「i 挿入」なしで -ngge が続く例外は (14) に見るように延べ 9 例ある。『満文原檔』『内国史院檔』にあった unde-i-*ngge* が無くなり、『満文三国志』では unde-*ngge* になっていることが分かる。-i-*ngge* は減少している。

- | | | | | |
|------|--------------------|---|----------------------|---|
| (14) | unde- <i>ngge</i> | 5 「まだ…しないもの、こと」 | unde- <i>i-ngge</i> | 0 |
| | muse- <i>ngge</i> | 2 「我々（包括形）のもの」 | muse- <i>i-ngge</i> | 1 |
| | julge- <i>ngge</i> | 1 「昔のもの」 | julge- <i>i-ngge</i> | 0 |
| | yece- <i>ngge</i> | 1 「(人名)」序文にあり。固有名詞に <i>i-ngge</i> は無いらしい。 | | |

例 (15) には名詞 *julge* 「昔」と *te* 「今」が入っている。

- (15) *julge-ngge waqa se-ci, te-i-ngge inu.* {*julgengge waka seci, teingge inu.*}
 「昔のものが非であれば今のは是」 <昔非今は> 『満文三国志』 8-27-8

julge は *e* 終りでも *i* が挿入されず、*te* には *i* が挿入されている。*julge-ngge* に *i* が挿入されていないことから *-ngge* は形式名詞でなく、名詞 *julge* に形容詞形成接辞 *-ngGA* の附いた形容詞（が名詞として使われたもの）とすべきであろうか。*julge-ngge waqa* と *te-i-ngge inu* のように対になっていながら、前項は名詞 + 形容詞形成接辞 *-ngGA*、後項は名詞 + 形式名詞 *-ngge*、というのでは対称的でない。*i* 挿入の有無は名詞と形容詞の区別より単語の長さが係わっている、とすべきかも知れない。*julge* の『満文三国志』中の出現度数は全 198 例、属格 97 例、奪格 5 例、その他 96 例である。2.1.2 中の表 3 の満原・内国中の出現度数と同様、属格を含んで過半数が格助詞を後続しているのも名詞的である。*julge-i-ngge* は無く *julge-ngge* 1 例である。

2.2.3. 『満文三国志』の形式名詞 *ningge*

『満文原檔』『内国史院檔』で仮定した規則 (10) (b) 「*ngge* の直前が、*n* 終りの名詞・形容詞であれば、*-ngge* の前に *ni* を挿入する。」は、漢語地人名の多い『満文三国志』に見られる新たな事実から (16) のように改めなければならない。

- (16) 『満文三国志』の「*ni* 挿入」((10) (b) の修正)
 「*ngge* の直前が、*n, ng* で終る名詞・形容詞 (*ng* で終る形容詞は無いと思うが) であれば、*ngge* の前に *ni* を挿入する。」

『満文三国志』では *ng* で終る名詞にも「*ni* 挿入」が適用されている、という事実が明確になった (17)。この事実は『満文原檔』『内国史院檔』には見られなかった。

- (17) *gung-ngge* → *gung ni-ngge* 「汝のもの」 <公之有> 18-53-4
dung-gung-ngge → *dung-gung ni-ngge* 「董公の(くれた)もの」 <董公所賜>
 1-90-6

n でなく母音で終る形容詞に *ni-ngge* が続く例外が延べ 3 例見出された：*amba ni-ngge* 「大なるもの」 <大者> <大者> が 2 例、第 1 回、第 18 回に見られる。*bolGo ni-ngge* 「清き者」 <其清者> 1 例。これは *n* 無しでも「*ni* 挿入」が行われているが、寧ろ *ni-ngge* が語彙化して名詞になっていると解釈すべきであろう。規則形 *bolGo-ngge* は『満文三国志』には無い。*amba ni-ngge* の方は、*amba-ngge* から

なら amba-ngge の筈であるが amba-ngge は『満文三国志』に無い。amba の多少古風な形 amban から「ni 挿入」で作られる amban ni-ngge は『満文三国志』に 3 例見られる。『満文三国志』全 24 回の中で、この 3 例のうちの古風な形 amban ni-ngge が前半の第 5 回、第 7 回、第 13 回で、新しい形 amba ningge が第 1 回、第 18 回、という分布が『満文三国志』の成立に意味があるかどうか気になる所である (cf. HAYATA, Suzushi 2014: 83-92)。

i で終る名詞・所有形容詞・母音で終る形容詞、には「i 挿入」も「ni 挿入」も無く、そのまま -ngge が続いて、jergi-ngge 「(…) 等級のもの」、mini-ngge 「私のもの」、ice-ngge 「新しいもの」、onco-ngge 「広いもの」等々である。

2.3. 『満文金瓶梅』における -ngge 類

2.3.1. 形容詞形成接辞 -ngGA

fang-ngGA → fa-ngGa <方士> のように fang<方>-ngGA で新しい形容詞を造って最終的には名詞になっている。『満文原檔』でも güng-ngGA → gü-ngge{gungge}「功ある」のように漢語 gung<功> から造語している。しかし漢語語基に -ngGA が附く例が特に多い訳ではない。

○ -ngGA と -ngge の対立

Xan; **Xala-ngGa** boU-i baita{*han; halangga booi baita*} 「韓の家のこと」<韓家之事> 98-25a7 (n; は語末の附点の n)。「(…) 姓の」<…氏> 等等、この -ngGa は「形容詞形成接辞」である。金瓶梅に Xala-ngGa は 108 例、母音調和で -ngGa になっている。

encu **Xala-ngge** giranggi yali -i adali aqū seme-U. {*encu halangga giranggi yali -i adali akū semeo*} 「異姓の者は…」<豈異姓不如骨肉> 1-28b7. Xala-ngge の -ngge は「形式名詞」。i 挿入なしの例外である。金瓶梅に Xala-ngge はこの 1 例のみ。

なおこの -ngge を形容詞形成接辞 -ngGa の母音調和の例外としないのは、1) -ngGa の母音調和の例外が一般に見られないことと、2) Xala-ngge が形容詞であると giranggi yali を修飾して「異姓の骨肉」になりそうだと、ということによる。i 挿入なし、という例外は時代が下ると多くなる。

boco-**ngGo**{*boconggo*} 「色のある、彩り豊かな」金瓶梅に 68 例、この -ngGo は「形容詞形成接辞」。母音調和によって -ngGo になっている。

boco-**ngge**{*bocongge*} 「～色のもの」金瓶梅 5 例、boco-i-ngge 金瓶梅 0。この -ngge は「形式名詞」。

2.3.2. 『満文金瓶梅』の形式名詞 -ngge

nialma-ngge 1 「ひと(他人)のもの」<人的>。「i 挿入」なしの例外であろう。「i 挿入」のある nialma-i-ngge は 3 例ある。「(…) 大人のもの」<(…) 大人の>、「ひとのもの」<人家的>の意味で、-ngge は形式名詞として問題ない。

『満文金瓶梅』に於て「i 挿入」は相当に不規則である。a, e 終りの名詞に -i を

介して *-ngge*, すなわち *-i-ngge* が後続するもの 29 例, *e* 終りでも形容詞の *fe* に *-i-ngge* が後続するもの 1 例, *oU* (実は *boU{boo}* 「家, 房屋」のみ) に *-i-ngge* が後続するもの 28 例, *o* (実は *bo* 「家, 房屋」のみ) に *-i-ngge* が後続するもの 8 例である。*-i* を介さずに *a, e* 終りの名詞に直接 *-ngge* が続くもの 7 例。満三同様 *-i-ngge* は減少している。母音終りの形容詞に続く例では *ningguci-ngge* 「六番目の人」 < 六姐, 六姐姐, 六兒 > (金瓶梅の主人公潘金蓮, 6 番目の娘だからそう呼ばれる) 40 例が最多である。

o 終りの名詞に直接 *-ngge* の続くのは 6 例ある (*boco-ngge* 5, *moro-ngge* 1)。

数詞 *ninggun* 「六」 *-ngge* → *ninggu-ngge* も 1 例あるが, *ninggun* は *n* 終りでも *ni* 挿入で *ninggun ni-ngge* になるということはない。「*ni* 挿入」(16) は「*ngge* の直前が, *n, ng* で終る名詞・形容詞」の場合である。やはり数詞は名詞でも形容詞でもない。

『満文金瓶梅』では, *fe* は形容詞なのに「*i* 挿入」が有ったり, (18) のように「*ni* 挿入」が有ったりする。これは明らかに例外である。

- (18) *ice-ngge be ujele-re fe ni-ngge be ongGo-ro* < 重新而忘故 > 満金 19-1-8
 「新しいものを重んじ, 古いものを忘れる」

o-i-ngge, U-i-ngge は, *boU-i-ngge{boingge}*, *bo-i-ngge* だけで, それも金瓶梅にこそ多数あるが, 『満文原档』『内国史院档』『満文三国志』にはその例を見ていない。『満文金瓶梅』でも *boU-i-ngge* 28 例, *bo-i-ngge* 8 例以外に *U, o, u* にこの *-i-ngge* の続く例は無い。なお *-ngge* に関係なく, *U, o, u, ü* に *-i* (属格具格標識) の続く例はどうか。*-i-ngge* でなければ属格の *-i* は *u* に附いている例が多い。円唇母音に *-i* の附いたものの出現頻度は表 4 の通りである。どの時代も度数はかなり出ている。

表 4 「円唇母音 + *-i*」(属格具格標識) の分布

	満原・内国	三国志	金瓶梅
<i>U-i</i>	607	2,043	598
<i>o-i</i>	509	423	530
<i>u-i</i>	1,169	933	1,017
<i>ü-i</i>	75	105	174

2.3.3. 『満文金瓶梅』の形式名詞 *ni-ngge*

n 終りの名詞・形容詞に *-ngge* が付き, 「*ni* 挿入」により *ni-ngge* の後続する規範形の例は勿論多数ある。また *n* 終りでなく, 母音終りの名詞・形容詞に *ni-ngge* が後続する例も『満文三国志』同様多い。*ni-ngge* が名詞化していることは顕著である。

母音終りの形容詞に *ni-ngge* の続く例は, 15 種 (異なり語) 延べ 22 語で, それ以前に比すれば著しく多い。*amba ni-ngge* 「大きい物・人」5 例が最多である。

2.4. 全体を通じた考察

満洲語の -ngge 類を、表面形から①形容詞形成接辞 -ngGA, ②形式名詞 -ngge, ③形式名詞 ni-ngge の三つに分けて考察した。『満文原檔』『内国史院檔』の時代の共時的記述を基準にして、次の『満文三國志』の時代の状態、その次の『満文金瓶梅』の時代の状態へと進めた。

①形容詞形成接辞 -ngGA (2.1.1) : この接辞は、語基との母音調和 (7) により、陽母音形 -ngGa, 陰母音形 -ngge, 円唇母音形 -ngGo の形で実現する。円唇母音形に実現する条件は、今回使用した資料の範囲内 (の确实と思われる例) では、語基末 2 音節の母音がすべて /o/ でなければならない、ということである。i-ngGa が i-ngGo になったと見られる例はなかった¹¹。

従来の文典や研究では、満洲語は一般に形容詞と動詞連体形にゼロ形式名詞が後続すると名詞句になることから、名詞と形容詞の区別に曖昧な記述が多い。名詞 (句) に -ngGA が附いて出来たものは形容詞で、それにゼロ形式名詞が附いた名詞句とは区別すべきである。もちろん固有名詞では語構成の明瞭でないものが多い。

②形式名詞 -ngge (2.1.2) : 『満文原檔』に見られる動詞語幹に直接続く延べ 14 例は接辞であるが、他の -ngge はすべて、動詞連体形・形容詞・否定形容詞・名詞属格形・数詞等の自立形式に後続するゆえ附属語とするのが適切である。

-ngge の前の名詞の形によって -i が附加され -i-ngge の形になる。この「i 挿入」規則は、「ngge の直前が、母音 a, e 終り名詞であれば、ngge の前に i を挿入する。」(9) (a) と言える。すなわち全ての名詞に -i が附いて属格形になるわけではない。『満文三國志』に Golo-ngge 「(…) 路のもの」はあっても Golo-i-ngge はない。

勿論 -ngge の前の形容詞に「i 挿入」はない。形容詞に属格形はないからである。

③形式名詞 ni-ngge (2.1.3) : これは形式名詞 -ngge の前に ni が挿入されて ni-ngge になっているのであるが、前に来るものが名詞だけでなく形容詞でも ni が挿入されている以上、この ni は少なくとも共時的な属格形とは言えない。『満文原檔』『内国史院檔』では ni-ngge の前に来る名詞・形容詞は n 終りのものばかりであったゆえ、「ni 挿入規則」としては「ngge の直前が、n 終りの名詞・形容詞であれば、ngge の前に ni を挿入する。」(10) (b) とした。しかし『満文三國志』では gung ni-ngge 「公(汝)のもの」、dung-gung ni-ngge 「董公のもの」等 ng 終りの名詞にも ni-ngge の後続している例がある以上、(10) (b) は、「ngge の直前が、n, ng で終る名詞・形容詞であれば、-ngge の前に ni を挿入する。」(16) としなければならない。『満文原檔』『内国史院檔』にも漢語は出てくるのであるが、漢語小説『満文三國志』『満文金瓶梅』

¹¹ ngge 類ではないが、動詞連体形接辞 (未完了 /-re/, 完了 /-Xa/) の母音調和に於ても、dobo-re → dobo-ro 「供える」、dobo-Xa → dobo-Xo 「供えた」であるが、Goi-re (→ Goi-re) 「当る」、Goi-Xa (→ Goi-Xa) 「当った」である。o-re → ojo-ro 「成る」は強変化動詞であるが o 音節が二つ続いて ro になっている。o 一個で o-Xa → o-Xo 「成った」は正に例外である。Möllendorff の転写方式では {oo} と書かれても (筆者の転写では oU) これは 1 音節であるゆえ、後続接辞は円唇母音にならない。例 : doU-re (→ doU-re) {doore} 「渡る」、doU-Xa (→ doU-Xa) {dooXa} 「渡った」、do-re (→ do-re) 「渡る」、do-Xa (→ do-Xa) 「渡った」。

の比ではない。そもそも満洲語では語末の *n* と *ng* の対立がなかった。漢語が多く流入して語末の *n* と *ng* の対立が生じた。それであれば、「*i* 挿入」も早田 (2011b) のとおり「直前が子音であれば、*ngge* の前に *ni* を挿入する」(3) (b) であろうし、後代になって語末に立つ子音が複雑になってもその規則のままで好かったのかも知れない。しかし、データの例外の示す所では、後代になるほど *ni-ngge* が *-ngge* からの派生形でなく、*ningge* という単一形態素名詞になっていることが見えて来る。

例外の時代別の推移を眺めてみたい。上に見たように、規則そのものは外来的語末 *ng* に係わる「*ni* 挿入」規則が変化しているかも知れないという程度であろう。しかし、*ni-ngge* の文法地位の史的变化 *ni-ngge* > *ningge* に係わる例外現象の増大は時とともに顕著になっていると感じられる。それを客観的に示したいが、『満文原檔』『内国史院檔』など、塗抹・書き込み・湿気破損等による判読不能部分が多いばかりでなく、満洲語系の固有名詞が多く、固有名詞であるか否かの認定、形態素の認定等も難しい所があって、真に厳密な数的処理は困難である。しかし不完全でも実態を紹介しなければなるまい。満洲語系の固有名詞は数に入れえない。後代の *kiungge* や *mucengge* に当たると思われる人名は様々の綴りで表記されているが、形容詞形成接辞 *-ngGA* を含んでいる可能性は十分に考えられる。しかし他のさらに曖昧性の高い固有名詞ともども今回の計数には入れえないことにした。

-ngge 類の例外は今回の計数では表 5 のようになる。

表 5 *-ngge* 類の例外

	『満原』『内国』			『満文三国志』			『満文金瓶梅』		
	総計	例外	%	総計	例外	%	総計	例外	%
<i>-ngGA</i>	2,214	0	0	1,139	0	0	2,204	0	0
<i>-ngge</i>	4,235	14	0	3,501	17	0	3,240	53	<u>2</u>
<i>ningge</i>	50	3	<u>6</u>	31	3	<u>10</u>	115	22	<u>19</u>

-ngGA: 例外なしと言っても、語基が陽母音系なのか陰母音系なのかは微妙である。

-ngge: 『満文原檔』『内国史院檔』の例外 14 は、*-ra-ngge* が *-re-ngge* になっている母音調和 (VH) の例外で、満原・内国は有圈点・無圈点混淆資料ゆえ問題である。

『満文三国志』の例外 17 は、うち 9 が *-ra-ngge* が *-re-ngge* になっている VH の例外
うち 8 が前に *i* の無い *-ngge*

『満文金瓶梅』の例外 53 は、うち 8 が *-ra-ngge* が *-re-ngge* になっている VH の例外
うち 7 が前に *i* の無い *-ngge*

うち 2 が前の形容詞 *fe* に *-i* が附いている例外

うち 28 が前の *boU{boo}* に *-i* が附いている例外

うち 8 が前の *bo* に *-i* が附いている例外

ningge: 『満文原檔』の例外 3 は、前の *n* 無し

『満文三国志』の例外 3 は、前の *n* 無し

『満文金瓶梅』の例外 22 は、前の *n* 無し

以上のことから以下のように言えよう。-ngGA は3期にわたり顕著な例外がなかった。-ngge については『満文金瓶梅』に於て例外の種類も絶対数も多くなったが例外の割合としては低いと言わざるを得ない。-ngGA, -ngge に比して ni-ngge の例外が時と共に増大していることは明らかである。満洲語を満洲世代と北京世代に分けて、

A「満洲世代」：『満文原檔』（最終記事は崇徳元【1636】年）・『内国史院檔』（今回利用した最後の記事は崇徳元【1636】年）・『満文三國志』（順治7【1650】年序）、

B「北京世代」：『満文金瓶梅』（康熙47【1708】年序）、

両世代の満洲語は極度に違うものになっていると感じられる。『満文金瓶梅』の満洲語は北京が清の首都になった順治元【1644】年以後に生まれた人のものであろう。

ni-ngge が単一形態素語（単純語）ningge になる兆しが、『満文原檔』『内国史院檔』の文字をそのまま受け取れば、早くから見られ、それが『満文金瓶梅』では極度に進んでいると言えよう。図1の円の面積は ningge の各時代の総計に対応している。

有圈点資料をもとにした満洲語の辞書・文典の記述に混乱を来したのも頷ける。

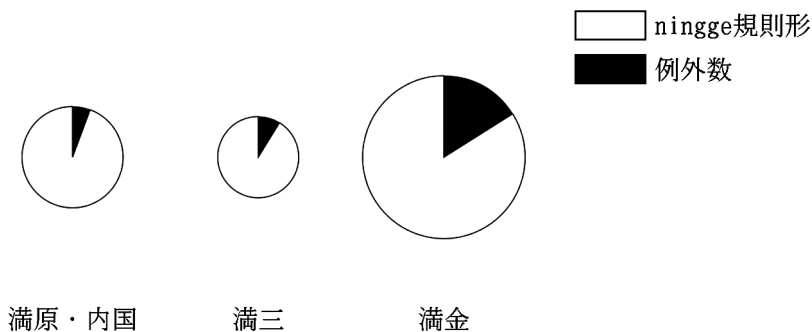


図1 ningge の例外の時代的推移

2.5. 結語

形式名詞 -ngge, -i-ngge, ni-ngge と、3個の形容詞形成接辞 -ngGa, -ngGo, -ngge は、『満文原檔』『内国史院檔』では、最初の3個が形式名詞 -ngge の異形態、最後の3個が形容詞形成接辞 -ngGA の異形態である。第3期の『満文金瓶梅』の時代では、ni-ngge の単一形態素名詞化が大きく進展していると言える。

-ngge 類全体について、「満洲世代」の満洲語から「北京世代」の満洲語への共時的・通時的考察を進めながら種々の新見を得た：-ngge 類の異形態の文法的地位および異形態派生条件としての、従来曖昧だった満洲語の形容詞と名詞の区別について一歩深めることができた；i 挿入・ni 挿入のような異形態派生規則も前より明確になった；「満洲世代」で ngge の派生形であった ningge が「北京世代」では独立の名詞になってきていることも見えてきた；今まで未報告の動詞語幹に直結する -ngge が「満洲

世代」の満洲語にのみ存在することが分った；満洲語の数詞が名詞でも形容詞でもないことが分った；unde「未だ…ず」や Güwa「他」が名詞であることが分った等々。

無圏点満洲字文献はすべて手書き文書で判読不能箇所も頗る多い。本稿に用いた所でも誤読がありうる。今後さらに初期満洲語の解明が続けられると期待している。

参 照 文 献

- Gorelova, Liliya M. (2002) *Manchu Grammar*. Leiden-Boston-Köln: Brill.
- 服部四郎 (1960) 「附属語と附属形式」『言語学の方法』461-491. 東京：岩波書店.
- 早田清冷 (2012) 「満洲語の派生接辞 -ngga/ -ngge/ -nggo」『満族史研究』11: 23-36.
- HAYATA, Suzushi (2014) Skewed distribution of Manchu genitive marker -i in *Ilan gurun -i bithe*. *Altai Hakpo* 24: 83-92.
- 早田輝洋 (1998a) 『満文金瓶梅訳注 序一第十回』東京：第一書房.
- 早田輝洋 (1998b) 「満洲語文語における文字表記と音韻についての一報告」*Altai Hakpo* 8: 55-76.
- 早田輝洋 (2003) 「満洲語の母音体系」『九州大学言語学論集』23: 1-10.
- 早田輝洋 (2006) 「満洲語の繫辞と存在動詞」『語学教育フォーラム第10号/アルタイ語研究I』11-59. 大東文化大学語学教育研究所.
- 早田輝洋 (2008) 「満文三国志について」『狩野直禎先生傘寿記念 三国志論集』357-382. 東京：汲古書院.
- 早田輝洋 (2011a) 「満洲語と満洲文字」『語学教育フォーラム第24号/言語の研究II—ユーラシア諸言語からの視座—』1-35. 大東文化大学語学教育研究所.
- 早田輝洋 (2011b) 「満洲語の形式名詞 ngge と ningge の区別」『語学教育フォーラム第24号/言語の研究II—ユーラシア諸言語からの視座—』115-122. 大東文化大学語学教育研究所.
- 早田輝洋 (2014) 「『満文原檔』中の重複満文の相対年代」*Altai Hakpo* 24: 69-81.
- 福田昆之 (1987) 『満洲語文語辞典』横浜：FLL.
- 河内良弘 (1996) 『満洲語文語文典』京都：京都大学学術出版会.
- 神田信夫 (代表) (1955-1963) 『満文老檔』【訳注】東京：東洋文庫.
- 岸田文隆 (1997) 「『三譯総解』の満文にあらわれた特殊語形の来源」東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- 松村潤 (2001) 『清太祖實録の研究』東京：東北アジア文献研究会.
- 津曲敏郎 (2002) 『満洲語入門 20 講』東京：大学書林.

執筆者連絡先：

[受領日 2015年3月3日

〒164-0014 東京都中野区南台 4-61-3

最終原稿受理日 2015年9月8日]

e-mail: hayatate@spn1.speednet.ne.jp

Abstract

The Grammatical Status of *-ngge* Morphemes in Manchu

TERUHIRO HAYATA

Early grammars and dictionaries of the Manchu language make no clear distinction between the three forms *-ngge*, *-i-ngge*, and *ni-ngge*, even the distinction between nouns and adjectives were not satisfactorily described.

In this paper the chronological development of the Manchu language is divided into three eras, first, the *Nurbaci* and *Hongtaiji* era (the late 16th century–1643), second, the *Shunzhi* era (1644–1661) and third, the *Kangxi* era (1662–1722). The data for the first group comes from manuscripts written in Manchu script almost all of which was without dots and circles, the data for the second and third groups are mainly from wood-block printed books in Manchu script with dots and circles.

There were as many as 14 instances of unusual verbs formed with stems directly followed by *-ngge* in the manuscripts from the first era, a clear indicator that the rules of derivational morphology were not always adhered to during this period. However, the number of nonstandard verb forms was greater in the texts from the third era; the most conspicuous example of which is the change of the derivative *ni-ngge* into a simplex noun *ningge*.

The reason for the differences between the morpheme usages can be best explained by the fact that the writers in the first two eras were from the Manchu district and the writers of the third were born and raised in Peking, a completely Chinese-speaking environment. From this textual analysis alone, it is clear that the grammar used during the time of Emperor Kangxi was strikingly different from its antecedents.